映像作家　今村 彩子さん

聞こ

警報「架け橋」を

〈震
者を取
「架け橋
を製作し
聞こえな
な時に、
たことを

地震が起き
仕事の打ち合
その直後につ
の海の映像
なぜ海を映し
んでした。「津
の映像を見て
けていたこと

震災から時
聞こえない人
ていないと感
きることは何
聴覚障害者向
の依頼があっ

「時間がたった今だからこそ、被災地にあらためて関心を持ってもらいたい」と話す今村彩子さん＝名古屋市緑区

日後に被災地に入り、2年4カ月の間に10回ほど訪れました。

取材をすると、地震直後の津波警報が聞こえず、どうすればいいか分からずにいたところを、通りかかったおまわりさんに助けてもらったろう者もいました。障害者の死亡率が住民全体の2倍だったという統計もあります。きちんと情報が伝わっていれば助かった命もあったはずなんです。

避難所でも食料配布を案内するアナウンスが聞こえず、周りの様子に神経をとがらせていないといけない。筆談者は文字が少なくなり、周囲に状況を訴えられない。生活は大変なものでした。

〈映画では、緊急の場合に備え、希望する住人の部屋の合鍵を自治会が預かる名古屋市の団地を紹介し、自治会長と住人のろう者の男性が交流する姿を取り上げた。震災とは直接関係なさそうだが、聞こえない人と聞こえる人をつなぐヒントがあるという〉

2人のやりとりがとてもよかったんです。初めて男性宅を訪ねた際、会長は同行した手話通訳者を介さず、小型のホワイトボードを使って筆談で身の上話を切り出しました。目の前の相手と直接コミュニケーションを取り、心を通わせようと一生懸命だった。助け合いは信頼がないとできません。そうやって付き合い、普段からつながりをつくることが大事なんです。

聞こえない人も歩み寄っていかないといけない。見た目で区別はつかないのですから、「私たちはここにいる」と知っていてもらう必要がある。ビーズで小物をつくるのが得意な被災者の女性は、折に触れて近所の人にあげていました。できることでつながりをつくっていれば、いざという時に助け合えると思います。

一昨年夏に上映を始めた「架け橋」の反響は大きいものでした。警察庁は職員が映画を見たことをきっかけに、全日本ろうあ連盟と協力してろう者向けの防災教室をやってくれています。取材した被災者にはいまだに仮設住宅で暮らす人もいますから、今後も被災地を訪れていくつもりです。

以前の私の原動力は怒りでした。「耳の聞こえない人の現状を知ってもらいたい」との思いが先に立っていた。でも、それでは興味のない人に届きづらい。求めるだけでは溝は埋まらない。[illegible]おもしろさ、と気づいて、一緒に考えるきっかけとなる映画をつくりたいです。

今後は自分が体験者との交流の中で得た経験を作品にしたいですね。これからも映画を撮りながら学んだことを実現していきたいと思います。

聞き手、写真・鈴木沙由梨

いまむら・あやこ　1979年名古屋市生まれ。[illegible]学時代にSF映画「E・T」のビデオを見て、映画制作を志す。愛知教育大卒。在学中に1年間、米カリフォルニア州立大ノースリッジ校に留学して映画制作を学んだ。ろう者や難聴者をテーマにしたドキュメンタリー映画を撮り続けている。

くつろぎトーク